

乳幼児期の発達における親子の絆の重要性について —子育て支援への視座—

成 田 朋 子

I はじめに

最近では「育児不安」や「子育て支援」等の言葉はマスコミ・新聞紙上・その他で取り上げられるだけでなく、日常の会話に上ることも多く、これらの用語はすでに多くの人々に認知されているものと思われる。ところがここ何年かに亘って、乳幼児をかかえる母親の「育児不安」が問題になり、「子育て支援」への必要性が説かれ、様々な内容の支援が試みられているにもかかわらず、一向に育児不安は軽減されない状況にあると言わざるを得ない。支援への努力がなされているにもかかわらず、何故育児不安は軽減されないのだろうか。

そこで、育児不安に陥る背景を探り、現代の子育てにおいて何が問題であるのか、どのような支援が必要であるのかについて考えてみたい。

子育て支援とは第一義的には子どもの成長発達をサポートするための支援であるはずであり、子どもが、特に乳幼児期にどのような環境の下で養育されるのが望ましいのかについて考えることにしたい。子どもの発達にとってなにが大切であるのかについて、共通認識に立った上で支援を進めることが必要だと考えるからである。

II 育児不安の背景

「育児不安」とは、大日向⁽¹⁾によれば「子どもの成長発達の状態に悩みを持ったり自分自身の子育てについて迷いを感じたりして、結果的に子育てに適切にかかわれないほどに強い不安を抱いている状態」と定義されており、「子育て支援」について栃尾⁽²⁾は「子どもの養育基盤である家族をなんらかの形で社会が支援し、家族と協働して子育てを行うこと」と説明している。

「育児不安」、「子育て支援」という用語は一時代前の書物やテキストには登場しない用語であり、時代の変化に伴って生まれた用語であるが、それ

では、これら「育児不安」、「子育て支援」等の現象はいつ頃から問題になってきたのであろうか。

1970年代の後半、教育の世界では、遊べない子ども、無気力な子ども、生活リズムの乱れた子どもが増加したことが問題として取り上げられ、その後これらの傾向をもつ子どもが増加した原因の一つとして、子育てする親の側の問題も指摘され始めた。そして子育てする親の側の問題状況の一つが「育児ストレス」、「育児不安」という言葉で表現されるようになったのである。また、「子育て支援」という用語も1990年代に入って、エンゼルプラン等少子化に対する様々な施策が立案される中でキーワード的に盛んに用いられるようになった用語である。

ところで、そもそも子育ては人類が誕生して以来連綿と受け継がれてきた営みであり、多くの人々は子どもの成長発達を見守ることに喜びを感じていたと思われるが、勿論その反面で子どもの成長発達の状態に悩みを持ったり、また自分自身の子育てについて迷いを感じることもあったと思われる。子育てが人間として当然の営みであると考えられていたとしても、いつの時代も子育てには迷いや悩みは付き物であったはずである。それにもかかわらず、何故1980年代、1990年代以前は子育てが社会の問題として取り上げられることも少なく、また「育児不安」もそれ程問題にならなかったのであろうか。

そこでまず、「育児不安」が社会問題になった背景を、社会的子育て環境の変化と、その中で変化してきた母親の意識変化から考えてみよう。

①社会的背景

育児不安が社会問題になった背景として、まず1980年代以前の子育て環境が現在のそれとは大きく異なっていたことを考慮しなければならないだろう。

かつては子どものまわりには父親・母親・祖父

母・その他の家族が常に存在し、家族だけでなく、地域の人々も多かれ少なかれ子どもと一緒に日々の生活を営み、自然な形で子育てに関わりをもっていた。子どものまわりにはいわば複数の養育者が存在していたわけで、足りないところは手を差し延べることが可能な誰かが補うという状況の中で子育てが進行していたのである。母親の子育てが上手くいかない場合でもまわりの誰か彼かが無意識にさりげなくサポートしていたものと思われる。

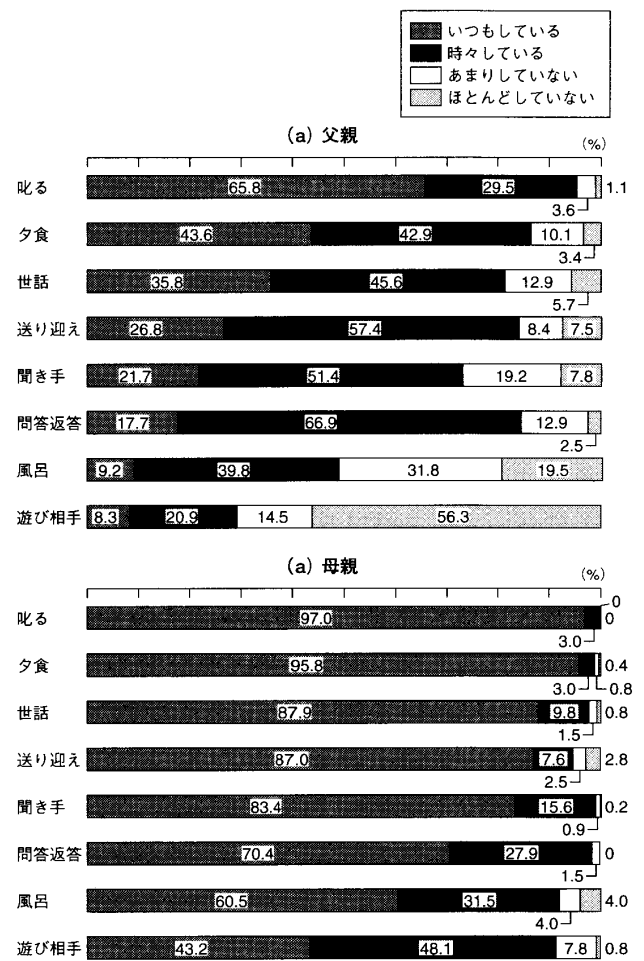
家族の中の父親・母親に限って考えてみると、日本では古くから「男は仕事、女は家事・育児」という性別役割分業意識があり、育児は当然母親の仕事と考えられていたと思われる。それでも、1960年代のいわゆる高度経済成長期以前は、社会の複雑さの程度は今日程ではなく、仕事の場も今日程家庭から離れていず、父親には現在に比してかなりのゆとりがあり、家で子どもたちと食卓を囲み、談笑することも今日程少くはなかったと思われる。勿論具体的な細々とした子どもの世話は母親任せにすることが多かったと思われるが、実際には、どこの父親も時間的・精神的余裕から自然に子どもの教育に関わって子育てに参画していたのではないだろうか。

ところが、この「男は仕事、女は家事・育児」という性別役割分業は、第二次世界大戦後世界に類を見ない復興を遂げた後の経済生産性を高めるのに都合良く利用されて、高度経済成長時代を支えることになったと考えられる。つまり、当時は機械化・情報化以前の時代であり、体力・筋力において優れた男性が家庭のことを心配しないで朝早くから夜遅くまで長時間働くことが要求されたが、それは、女性が家事・育児を一身に担うことで可能になったのである。その結果男性はますます仕事に専念し、次第に育児に関われなくなってしまい、それ程問題と認識されないまま、「男は仕事、女は家事・育児」という性別役割分業がより助長されることになったのである。

その後、機械化や情報化が進み、機械や情報の操作は知識と技術があれば男性だけでなく女性にも可能となった。その一方で女性の高学歴化が進み、女性が社会的職業生活に就くことが一般的な傾向になってきた。さらに、サービス産業の拡

大も呼応して女性労働が増加し、働く母親が増加した⁽³⁾のである。

しかし、このように社会構造が変化し、人々の生活や意識が変化したにもかかわらず、我が国では育児は相変わらず母親一人が担い、父親は子育てに参画しようとしにくい状況が続き、「男は仕事、女は仕事も家事・育児も」という新・性別役割分業が確立してしまっている。父親・母親の育児行動の差は図1⁽⁴⁾の通りである。



(牧野・中野・柏木, 1996より)

図1 父親・母親の育児行動

かつてのような教育機能を備えた地域社会の中で子育てができれば、育児不安を感じることも防げると思われるが、高度経済成長を支えた産業構造のために進んだ核家族化の中で「女は家事・育児」もしくは「女は仕事も家事・育児も」の役割を担い、精神的に閉ざされた中で子育てを受けもつ母親に育児不安が芽生えることはいわば当然の帰結かもしれない。

以上、育児不安が社会問題になってきた背景について子育て環境の社会的変化の側面から考えてきたが、次に母親の側の意識の変化に注目してみたい。

②母親の意識変化

近年、女性の平均寿命が延び、一方で少子化が進むという人口動態上の変化に伴って、女性の子育てを終えてからの人生が長くなった。その中で母親の子どもに対する気持ちも徐々に変化している(図2⁽⁵⁾参照)。

子育てが女性にとって最も重要な仕事であると教育された時代の女性は比較的平穏な気持ちで子育てに励むことができたが、学校教育の中で男女平等教育を受けて成長し、社会に出て能力評価を受けることに慣れた女性が出産して子育てを始めると、多くの女性は、これまでのように一人の女性として認められることが少なくなったことへのいらだちを感じ、さらに思い通りにならないことの多い子どもの扱いに戸惑いを感じる

ようである。その上、気軽に相談できる人も身近にせず、徐々に自分の育児に自信を失い、育児不安に陥るのである。

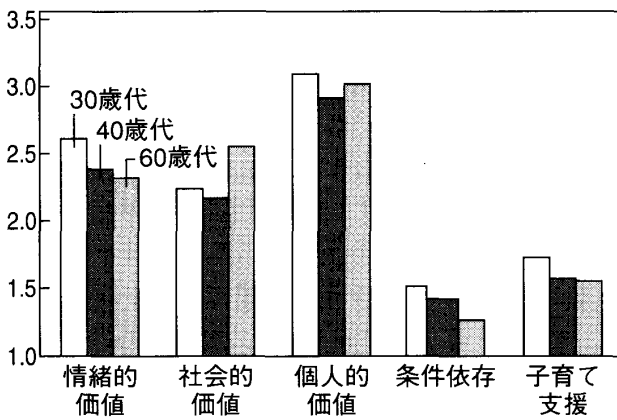
年代による育児中の感情の違いは表1⁽⁶⁾の通りであり、図2、表1は時代とともに母親の子どもに対する気持ちが確実に変化していることを如実に示していると思われる。

さらに母親が働いているか否かについて試してみよう。

機械化と情報化の進展により働く女性が増えたことは上で述べた通りであるが、当初は、働く母親は「男は仕事、女は家事・育児」に代り、「男は仕事、女は仕事も家事・育児も」という新・性別役割分業が求められるため、仕事と家庭の両立が大変と考えられてきた。

仕事と家庭との間のジレンマの様相を国民生活選好度調査から見てみよう。

国民生活選好度調査⁽⁷⁾によると、子どもの存在と生活満足度との関係は、子どもがいる場合の



(永久・柏木, 2000)

<p>〈情緒的価値〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年をとったとき子どもがないと淋しい ・子どもがいると生活に変化が生まれる ・家庭がにぎやかになる ・子どもをもつことで夫婦の絆が強まる <p>〈社会的価値〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもを生み育ててこそ一人前の女性 ・結婚したら子どもをもつのが普通だから ・次の世代をつくるのは、人としてのつとめ ・姓やお墓を継ぐものが必要 	<p>〈個人的価値〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもを育ててみたかった ・子どもが好きだった ・子育ては生き甲斐になる ・子育てで自分が成長する ・女性として、妊娠・出産を経験したかった <p>〈条件依存〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・経済的なゆとりができた ・自分の生活(趣味・旅行など)に区切りがついた ・夫婦関係が安定した ・2人だけの生活は十分楽しんだ ・自分の仕事が軌道にのった <p>〈子育て支援〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・よい保育園があったので ・子育てを手伝ってくれる人がいたから ・親が楽しみにしていた
--	---

図2 世代によって子どもの価値は違うか

表1 三世代の母親における育児中の感情
—最近の母親に強い育児不安—

(%)

	67.2歳世代	54.0歳世代	31.5歳世代
何となくいらいらする	34.0	< 57.1	< 83.7
自分のやりたいことができなくて焦る	24.0	< 40.0	< 69.4
育児ノイローゼに共感できる	4.0	11.4	< 59.2

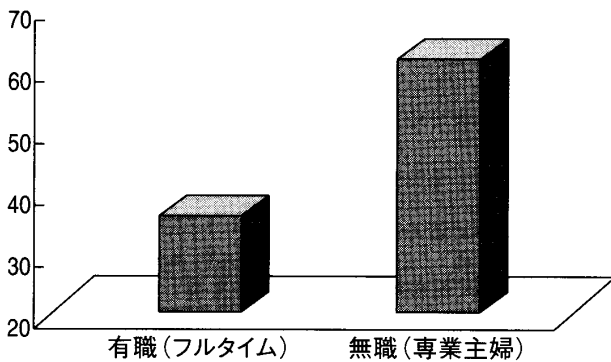
<, >, p < .01 で有意差あり。

(大日向, 1998)

方が高いという結果が出ている。男性では子どもがいる人でいまの生活全般に満足している人の割合は46.2%、子どものいない人では34.0%。女性では子どもがいる人の47.6%が満足しているのに対し、いない人では40.9%である。女性に比べ男性の生活満足度は子どもの有無によって大きく左右されることが窺われる。女性の場合、内訳をみても、男性ほど単純ではないことがわかる。無職の既婚女性と有職の既婚女性では結果が逆なのである。無職（専業主婦とパートタイム従業者）の既婚女性では、子どものいる人のほうがいない人より生活満足度は高い（子どものいる人—48.5%、いない人—39.2%）。有職の既婚女性では反対に子どものいない人のほうが生活満足度が高くなっている（子どものいない人—48.7%、いる人—45.7%）。しかしその差はわずかである。

このように、調査は、自己の個別性を存分に発揮したいという欲求と、子どもを産み育てることとの間のジレンマが、有職の既婚女性に現れていることを示している。

ところが、職業の有無と育児不安の関係をみると、有職の方が育児不安が少ない⁽⁸⁾のである（図3参照）。

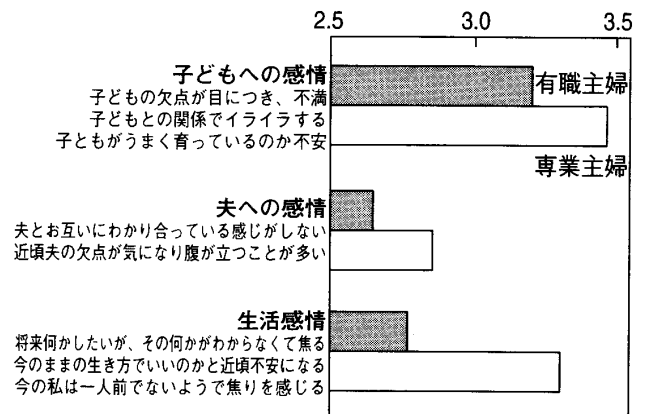


(横浜市教育委員会／預かり保育推進委員会，2001
文部科学省預かり保育調査最終報告書)

図3 無職／専業主婦と有職母親（働く母）の子育てストレス (%)

また仕事をしている女性は身体的な疲労やストレスは大きいですが、育児不安も低く、夫との関係も良い⁽⁹⁾といったこともわかってきたのである（図4参照）。

以前は、一人の人間が複数の役割を担うとそれらの役割の間で矛盾や葛藤が起こって、心理的に



(永久，1995)

図4 子ども・夫・生活への感情
専業主婦と有職主婦（働く母）では異なる

もよくないと考えられてきたが、実際には、働く母親は多くの役割をこなすことでむしろ達成感を味わい、それが自信を生み、充実感を味わうという結果である。

以上のように、育児不安と一口に言っても、その背景は複雑で、母親が置かれた時代背景の中で、また個々の母親の生活環境の中で、様々な要因が存在するということであろう。

Ⅲ 育児不安を軽減するために考えておかなければならないこと

社会が変化し、家族も大きく変化した時代にあっては、子どもだけを対象にするのではなく、子どもを育てる家庭をも視野に入れた福祉が必要であることから、平成9年、児童福祉法が改正された。そして、子どもの健やかな成長のための子育て支援が必要であるとの認識から、エンゼルプランに代表される子育て支援施策が策定され、様々な場で様々な子育て支援が行われている。それにもかかわらず育児不安は一向に軽減されない。

Ⅱで述べたように育児不安をもたらす要因が複雑であるとは言え、育児不安はなぜ軽減されないのであろうか。育児不安を軽減するにはどのような条件整備が必要なのであろうか。また子育て支援に携わる人々は何を考慮しておかなければならないのであろうか。

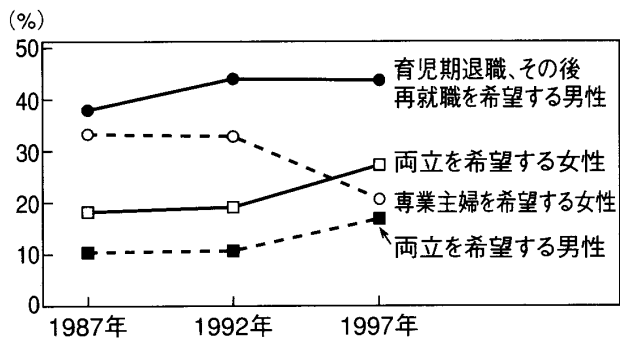
①日本の男性の意識改革

まず男性の側の問題を考えてみよう。

近年見かける若い親子連れには父親が子どもの世話をまめまめしくするほほえましい姿も多

く、全体としてみると男女共同参画の意識が徐々に浸透してきているようである⁽¹⁰⁾。

しかし未婚の男女を対象とした調査は、女性の意識変化に比べると、男性の側は若い世代でもまだまだ性別役割意識が強いことを示している⁽¹¹⁾ (図5参照)。



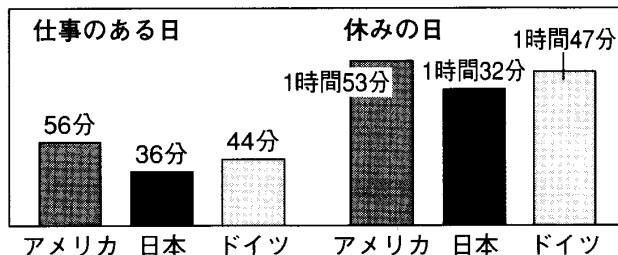
(国立社会保障・人口問題研究所, 1999)

図5 女性が望むライフコースと男性が女性に望むライフコース

このことに関して「日本の女性の生活や意識は、この2.30年間で、世界全体の傾向と共通の方向へと大きく変化してきているにもかかわらず、性別役割分業観は、先進国の中で日本だけ特異に変化していない⁽¹²⁾と指摘されている。社会が変化し、「母親は家事・育児」の時代から「母親は仕事も家事・育児も」の時代になり、父親も育児に参加すべきだと言われてきたはずであるにもかかわらず、一般に日本の父親は、子どもと触れ合う時間が少ない、子どもに関わる度合いが低いのである (図6⁽¹³⁾、表2⁽¹⁴⁾)。

父親の協力が少ない中で育児している母親が父親の育児協力を望んでいることは、父親が育児に参加している方が母親の育児不安は低減する (図7⁽¹⁵⁾) ことから明らかであろう。

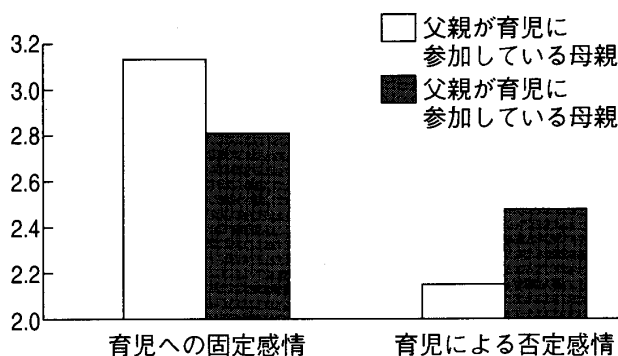
それでは、父親が子どもに関われば育児不安は解消するのであろうか。



注：ドイツは旧西ドイツ

(総務省青少年対策本部, 1986)

図6 父子の接触時間



(柏木・若松, 1994)

図7 父親の育児参加によって母親の育児不安は低減する (数値得点)

筆者の行った調査では母親達のほとんど (85.2%) が育児・家事協力を望んでいるが、細々とした世話をしてもらうこと (物理的支援) ではなく、夫に育児の大変さをわかってほしい、精神的に支えて欲しい (精神的支援) と思っていることが示された⁽¹⁶⁾。つまり、父親が育児に参加するだけでは母親の育児不安は解消しないのである。父親に望む育児参加は、子どものためというよりは、何よりも母親自身が世の中から取り残された閉塞感から逃れたい、そのためのものであると考えられる。

表2 父母の子どもに対する関与度パターンの国際比較 (%)

国別 \ 型別	父母積極型	母親積極型	父親積極型	父母消極型
日本	10.7	58.5	6.1	24.8
アメリカ	50.1	33.9	9.2	6.8
西ドイツ	31.0	55.5	5.1	8.4

(総務庁青少年対策本部, 1987)

また、夫が育児責任をもっている方が母親に育児不安が少ないという資料(図8⁽¹⁷⁾)も示されている。

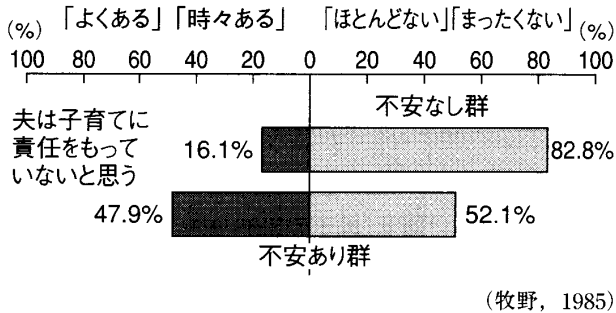


図8 夫の育児責任と妻の育児不安の関係

以上の資料から、父親の子育て参加で大切なことはオムツを替えたり、赤ん坊をお風呂に入れたりといった具体的な行動をすることだけではないことがわかる。それらは二次的なことである。それよりも母子関係を精神的にサポートする、あるいは母親の精神的な負担を軽減する、つまり育児全体に責任をもつことが現代の父親に求められている子育て上の役割ではないだろうか。

しかし、父親も母親と同じ時点から親になるわけで、最初から立派な包容力ある夫という役割を演じるのは難しいと思われる。夫・妻が共に支え合い、子育てをする中で親になっていく側面が大切なのではないだろうか。

今後は「男も女も仕事も家事・育児も」という家庭における男女共同参画を前提に、夫・妻が協力して、夫々の家庭のやり方で仕事、家事・育児を担うことが必要になるとと思われる。

②母親の意識改革

母親の側からも考えておくべき問題があるはずである。

Ⅱで育児不安を引き起こす要因について考察し、中でも社会の変化に伴って女性の生活と意識に変化がもたらされたことに触れたが、職業生活を経験してきた多くの母親にとって子育ては、すぐに明確な答えや結果が出ていたこれまでの生活とは全く異なる世界であり、ほんの些細な事柄に不安になってしまいがちである。このような母親の不安を少しでも軽減し、子育てが支障なく進むようにと様々な支援の場が提供されるようになり、多くの母親は子どものみとの閉ざされた世

界から抜け出すために、また母親自身の友達を得るために子育て支援の場に出かけている。

支援の場で母親たちが不安を軽減し、スタッフや他の親子から子育ての知恵を得て、それらをそれぞれの家庭で少しでも活かすことができれば意義ある活動になるのであるが、何名かの子育て支援事業の担当者から「近隣の子育て教室には必ず出席する親子、またかなり遠くのいくつかの施設まで毎日のように車でジブシーする親子がいるんですよ。」という言葉が何度か聞かされた。母親たちが自分自身の子育てを身につけるまでの助走期間であると解釈したいものと思っていたが、最近では「まるで荷物を運ぶみたいに子どもを連れてきて、スタッフに子どもの相手をしてもらい、自分は何もしようとしなない母親もいるんですよ。」という言葉にはいささか考えさせられてしまう。クローズドな場から同じような環境の親子が集まって、担当者から遊びの仕方を学び、情報交換し、ストレスを軽減できる有効な場であり、その点では問題ないが、どのようにすれば親子で楽しく関わることができるのかを身に付けられる場であるはずなのに、それを日々の家庭の生活、触れ合いに活かさない親が増えてきているのである。

子育て支援事業は子どもが順調に成長発達することを支える役割を担う親が親になるための支援である。事業に参加したことを活かし、それ以外の場では主体的に子育てする必要があるはずであり、このことを誰よりも母親が理解しなければならないと思われる。しかしながら、育児不安に陥っている人々の多くに主体性を即求めるのは難しいことかもしれない。支援する側も、これら支援事業の意義を再確認しながら、いわゆるエンパワーメントたりうる事業の内容を工夫する方策を模索しなければならないのであろう。

③子どもの成長発達への理解

先に子育て支援とは子どもが順調に成長発達するのを支える親をサポートすることであると述べたが、ここで改めて子どもの発達、特に乳幼児期の発達の本来の姿はどのようなものであるのかについて考えてみよう。

人間の赤ん坊は280日間を母体内で過ごし、その間すでに母子の絆は成立していると考えられる。誕生直後の状態はかつては白紙の状態で生ま

れてくると表現されていたが、1960年代以降盛んになった新生児を対象とした研究によって、出生直後の赤ん坊でも、様々な能力をもっていることが明らかになった。勿論、月齢を経た乳児や幼児に比べると明らかに未熟ではあるが。そして未熟ながら泣く、体を動かす、その他の能力を駆使して大人を引き寄せ、授乳、オムツの交換、抱く、あやすなどの世話をしてもらっているのである。

ところで、授乳時の親の顔と赤ん坊の顔の距離は新生児の最も見えやすい20～30センチの距離にあることがわかっている。そして親が赤ん坊に話しかけるときの目も無意識のうちにやはり20～30センチの距離にあり、母親は世話をしながら赤ん坊にとって心地よい独特の語り掛け—マザーリーズ—で話しかけるのである。これらの関わり合いを繰り返す中で、ほとんどの赤ん坊が母親に対して特別な結びつきを形成することになる。その後母親を中心にして丁寧に子どもに関わってくれる人々に愛されて育つことにより、子どもは健やかに成長発達し、人を愛し、自分をも愛せる大人になっていくのである。

子どもが成長していくこのような姿を考えると、妊娠出産哺乳ができるという母親の身体性、自然性は、無視できないものと思われる。

勿論、この母親の身体性、自然性は絶対的なものではなく、そのことは、これまでに行われたいくつかの研究に示されている。たとえば、子どもは母親に対するのと同様父親に対しても愛着を形成することができるし、さらに父親母親以外の人にも愛着が形成されることも示されている⁽¹⁸⁾。また最近では長時間保育を受ける乳幼児が増加

しているが、長時間に亘る保育を受けても子どもの発達に支障はないという結果も出されているのである⁽¹⁹⁾。したがって、母親が育てるか他人(保育者)による保育か、その是非を問うことよりも、誰であれどのような愛情をもって子どもにかかわり、どのような養育をするかということが問題になる⁽²⁰⁾ということであろうか。しかし様々なことが明らかになっても、上述の発達の過程を考えると、乳幼児期の特定の人との結びつきの重要性は否定されないものと思われる。

以上のことからここで、子どもの成長発達にとって、初期の母子間の、もしくは特定の人との交流、そしてその人との乳幼児期を通してのしっかりとした結びつきが何よりも重要であることを確認しておきたい。

②家族の重要性への認識

子育て支援を考える際に確認しておきたいこととして家族の重要性にふれておこう。

子どもの発達における家族の役割について、アメリカの国立保健研究所の小児保健・人間発達研究所(HICHD)が行った興味深い調査結果が報告されている⁽²¹⁾。

アメリカでは現在、6カ月児の約半数が週30時間以上の保育を受け、生後12カ月までに子どもの80%が何らかの形で母親以外による保育を受けるという状況にある。本調査は、子どもの発達に及ぼす保育の影響を評価するために計画され、全米24の病院で1991年に生まれた1364人の子どもを長期的に調査したものである。

調査の結果は表3の通りであり、結果は、家族の特徴や親による育児は、乳幼児の母親に対する

表3 第一段階における研究成果 (家族及び子どもの変数をすべて考慮したうえでの結果)

	愛 着	親子関係	保育時に従順でない	問題行動	認知発達と就学レディネス	言語発達
家 族	+	+	+	+	+	+
保 育 の 質	!	!		+	+	+
保 育 の 量	!	!		!		
保育の種類			!	!	+	+
保育の安定性*	!		!			

*安定性とは保育の施設や人を変えないこと + : 一貫した影響 ! : 何らかの条件下での影響

(CRN 2000 より)

愛着や母子関係、子どもの社会的能力、問題行動、言語的発達および就学レディネスと重要な関連性があることを示すものであった。家族の特徴ならびに親による育児は子どもの発達結果に一貫して関連するが、保育の特徴は必ずしもすべてとは関連しない。さらに、家族の特徴や親の育児による影響の方が、保育の影響よりも大きいことを示すものであった。

保育の質を保育士の子どもに対する反応が積極的かどうかという側面にとらえている点については、保育の質を保育士の働きかけだけでとらえるのみで妥当であろうか、常に積極的に関わることが質の高い保育といえるのだろうか、また、問題行動を保育者の報告による問題行動としている点については、保育者がある時点でとらえた問題行動がその子どもの将来の長いスパンでみた時間問題行動といえるのだろうかなどの疑問が起り、さらに詳しい資料にあたる必要があるだろう。しかしこれらの疑問を相殺しても、保育の特徴よりも家族の特徴の方が子どもの発達結果をよりよく説明しているという事実は注目すべき結果である。

人間の発達はさまざまな要因が絡み合って進むのであり、ある時点でのダメージはその後の要因によって十分修正が可能かもしれない。例えば米で保護されたジーニーの例⁽²²⁾や東北地方で発見されたFとGの例⁽²³⁾等のように信じがたい程劣悪な環境から救出された子ども達もその後の手厚いケアによって遅れを取り戻したというキャッチアップ現象も報告されている。

しかしこれらの例は特異な例であり、現実問題としては多くの子ども達がこれ程劣悪な環境で育てられることも稀有であろうし、もしそうであってもこれ程恣意的な手厚いケアをうけられるとは限らない。だからこそ人生のスタートの時点で母親もしくは母親に代わる人に丁寧に関わってもらい、安定した気持ちになれるよりどころをしっかりと形成しておくことが重要なのである。

人生のスタートの時点で特定の人物との結びつきを形成し、成長発達の基礎ができた後、子どもはさまざまな人々とのかかわりを重ねる中で成長する、つまり複数のネットワークの中で成長するのであるが、その場合でも最終的なよりどこ

ろは必要である。父親母親は常に子どもに関心をもち、必要な時に受け入れなければならない。つまり、家族の大切さは根底のところを押さえておく必要があると思われる。

IV 子育て支援の進むべき方向

現在試みられている様々な子育て支援が本当の意味での子育て支援であるためには、どのような子育て支援がおこなわれなければならないのだろうか。

IIで述べたように、子育て支援が「子どもの養育基盤である家族をなんらかの形で社会が支援し、家族と協働して子育てを行うこと」であり、子どものより望ましい成長発達が目的であるならば、家族や地域のサポート、幼稚園・保育所その他で行われる全ての子育て支援が、単に母親の育児不安解消のためだけでなく、子どものための支援になることを目指さなければならない。

多くの場合、子どもを一番身近に育てているのは母親であり、IIIで述べたように子どもにとって重要な意味をもつ母親が精神的に望ましい状態で子どもに触れ合うことができれば、子どもにもよい影響を及ぼすはずである。ところが、母親が孤立し自分の世界をもてないでいる状況、母親が一人の女性として、個人として生きたいという願いが充たされない状況では、精神的に望ましい状態で子どもに触れ合うことができなくなってしまふ。多くの親子が好ましくない状況に陥ってしまっている今日、この状況から親子を救い出すことが求められているのであり、そのための子育て支援である。

時代とともに母親の育児に対する意識が変化し、母親も一人の女性として、個人として生きたいという願いが強くなってきていることは、働く母親が増加していることにもあらわれているといえるだろう。このことから最近では、母親にもどんどん職業を与えるべきだというような発言も聞かれるようになった。

ところで、現代の母親の置かれた立場を浮かび上がらせたこの発言を耳にした時、一般の人々はどのような印象を受けるであろうか。子どもにとっての父親母親・家族の重要性を大前提にした上での発言であろうが、肝心の子どものことが疎

かにされる恐れも出てくると考えるのは杞憂であろうか。

たとえ母親に職業を与えても、我が国の現在の労働環境の中では、能力を認められるには職場で男性と同様過労に陥る危険性も考えられ⁽²⁴⁾、父親も母親もますます子育てから遠ざかる恐れも出てくる。

子育てには、育児に不満を抱いている母親が考えているように失われる面だけではなく、得るものもあるはずである。子育てをする中で親自身も人間として成長するという報告⁽²⁵⁾もある。したがって特に乳幼児期という人生のスタート時点での子育てが何よりも大切な仕事であるということがすべての人々の共通認識になれば、育児中無理のない形で仕事を続けられたり、育児休暇終了後職場復帰できたり等、価値ある子育てを疎かにしない労働の仕方も編み出されるであろうし、また父親も母親も共同で育児に参画することが当然のこととして受け入れられるようになるのではないだろうか。その結果、父親も母親も自分の役割に満足できる状態になり、育児不安を抱くことも少なくなり、子どもとより良い関わりをもつことができるものと思われる。

子どもにとって望ましい子育てがなされるために、母親が社会との接点を持ち、個人として生きる場を持てるよう支援する場合、子どもの発達にとって父親母親・家族がいかに重要であるかということも合わせて提言されなければならないのではないだろうか。子育て支援とは、「育児そのものを支援するのではなく、乳幼児期にしか経験できないわが子との触れ合いを大切にしながら子育てに喜びをもてる親を育てていく」⁽²⁶⁾ということであり、それが今日求められている真の子育て支援と言えるのではないだろうか。

【注】

- (1) 大日向雅美 2002 育児不安とは何か——その定義と背景 発達心理学の立場から 大日向雅美(編) 特別企画 育児不安 日本評論社 10-15
- (2) 柄尾 勲 2002 子育て支援体制 新・保育士養成講座編纂委員会(編) 新・保育士養成講座 11 巻 家族援助論 第3章 64-70

- (3) 日本総合愛育研究所(編) 2002 日本子ども資料年鑑2002 KTC中央出版
- (4) 綿引伴子・新谷由里子・三好和子・詫摩紀子 1996 父親、母親の属性と子どもとの接触時間・育児参加 牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子(編) 子どもの発達と父親の役割 ミネルヴァ書房 93-97
- (5) 柏木恵子 2001 子どもという価値 少子化時代の女性の心理 中央公論新社 67-78
- (6) 大日向雅美 1988 母性意識の世代差について 大日向雅美 母性の研究 その形成と変容の過程：伝統的母性観への反証 川島書店 107-134
- (7) 経済企画庁国民生活局(編) 2000 平成11年度国民生活選好度調査「国民の意識とニーズ」
- (8) 横浜市教育委員会／預かり保育推進委員会 2001 文部科学省預かり保育調査最終報告書
- (9) 永久ひさ子 1995 専業主婦における子どもの位置と生活感情 母子研究 16 50-57
- (10) 日本経済新聞 2002.9.8. 「夫は外、妻は家」賛否が半々に 男女共同参画意識だけ? 「妻が家事」なお80%以上
- (11) 国立社会保障・人口問題研究所 1999 女性が望むライフコースと男性が女性に望むライフコース
- (12) 山本真理子 1997 母親の意識はどう変わってきたか 山本真理子(編著) 現代の若い母親たち 新曜社 1-15
- (13) 総務庁青少年対策本部 1986 子どもと父親に関する国際比較調査
- (14) 総務庁青少年対策本部 1987 日本の父親と子供：アメリカ・西ドイツとの比較 子供と父親に関する国際比較調査報告書
- (15) 柏木恵子・若松素子 1994 「親となる」ことによる人格発達—生涯発達の視点から親を研究する試み— 発達心理学研究 5 72-83
- (16) 拙稿 1999 子育て中の母親の心理とサポートのあり方について 名古屋柳城短期大学研究紀要 21 51-61
- (17) 牧野カツコ 1985 乳幼児をもつ母親の育

見不安：父親の生活および意識との関連
家庭教育研究所紀要 6 11-24

- (18) Schaffer, H.R. 1998 無籐 隆・佐藤恵理子(訳) 2001 子供の養育に心理学がいえること 新曜社
- (19) 前掲書 (18)
- (20) 柏木恵子 2001 子育て支援を考える 変わる家族の時代に 岩波書店
- (21) Friedman, S.L. 2000 NICHD 早期保育研究の成果について 子育てのスタイルは発達にどう影響するのか～乳幼児1364人を7年間に亘り追跡調査・NICHD～ CRN国際シンポジウム「21世紀の子育てを考える」の報告 ベネッセコーポレーションチャイルド・リサーチ・ネット (CRN) p4-13
- (22) Curtiss, S. 1977 久保田競・藤永安生(訳) 1992 ことばを知らなかった少女ジーニー 精神言語学研究的記録 築地書館
- (23) 藤永 保 1987 人間発達と初期環境 有斐閣
- (24) 日本経済新聞 2002.9.9. 女性に忍び寄る過労不安 長時間労働で疲弊 「男性型社会」からの脱却を
- (25) 柏木恵子 1996 子ども・育児による親の発達 牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子(編) 子どもの発達と父親の役割 ミネルヴァ書房 p59-72
若松素子・柏木恵子・大野祥子 1996 親としての成長・変化と育児参加 牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子(編) 子どもの発達と父親の役割 ミネルヴァ書房 121-134
- (26) 佐藤暁子 2002 母親の意識の変化と育児支援のあり方について 第2回幼児の生活

アンケート報告書 ベネッセ研究所報 22
89-92

【参考文献】

- CRN 2000 子育てのスタイルは発達にどう影響するのか～乳幼児1364人を7年間に亘り追跡調査・NICHD～ CRN国際シンポジウム「21世紀の子育てを考える」の報告 ベネッセコーポレーションチャイルド・リサーチ・ネット (CRN)
- 柏木恵子 1998 結婚・家族の心理学—家族の発達・個人の発達— ミネルヴァ書房
- 柏木恵子 2001 子どもという価値 少子化時代の女性の心理 中央公論新社
- 柏木恵子 2001 子育て支援を考える 変わる家族の時代に 岩波書店
- 牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子(編) 1996 子どもの発達と父親の役割 ミネルヴァ書
- 根ヶ山光一(編著) 2001 母性と父性の人間科学 コロナ社
- 大日向雅美(編) 2002 特別企画 育児不安心の科学, 103 日本評論社
- Schaffer, H.R. 1998 無籐 隆・佐藤恵理子(訳) 2001 子供の養育に心理学がいえること 新曜社
- 山本真理子(編著) 1997 現代の若い母親たち 新曜社

The Importance of the Bonds between Parents and Children in Infantile Development

— How to Reduce Mother's Worries about Child Rearing —

Narita, Tomoko*

Recently many mothers have felt worries about child rearing. Although several means have been attempted to reduce these worries, many mothers have not been able to reduce their anxieties.

There are many factors which cause worries. One of them is the change of consciousness of mothers. It becomes clear that working mothers have less worries about child rearing because they feel a sense of fulfillment and have self-confidence.

For this reason, some researchers assert that every mother should have a job. However I am concerned that working mothers may not pay enough attention to their children.

The bonds between parents and children are very important to infantile development. People should recognize that child rearing is an important task, especially during infancy, and it should be natural for both fathers and mothers to take part in child rearing together.

キーワード：育児不安，子育て支援，母親の意識変化，親子の絆の重要性，親としての成長